

拓人新聞

2016年
春号

No.057

株式会社やる気スイッチ
グループホールディングス
〒104-0032
東京都中央区八丁堀2-24-2
八丁堀第一生命ビル
電話 03-3537-1661

キッズデュオ東北で初開校

2016年2月10日、キッズデュオの加盟契約調印式が行われた。今回加盟いただいたのは、宮城県仙台市泉区に本社を置く株式会社清月記。調印式には、菅原社長と奥様の菅原常務にお越しいただいた。2月27日に1校目となるKD上杉、3月19日に2校目となるKD泉中央を共に仙台市内で開校する。これで東北初のキッズデュオが誕生する。



調印式を終え、握手する高橋社長(左)と菅原社長(右)

株式会社清月記は、葬祭業を中核事業とし、その他、仏壇仏具等の販売やケータリングなどを行っている企業。菅原社長が25歳で創業して以来順調に業績を伸ばし、仙台市を中心に、現在は20の施設を展開する仙台を代表する葬祭関連企業にまで成長した。現在は、葬祭業にとどまらず、ご高齢の方の暮らしを豊かにするための無料相談施設「ライフスタイルコンサルジュ」というサービスを始め、趣味やグルメ、旅行や学びなど、様々な生活のサポートを行っており、今回のキッズデュオの開校の次には、プライベート事業の開始も4月に控えているなど、菅原社長が掲げる「ゆりかごから墓場まで」の、まさに人の一生に関わる企業へと進化しようとしている。

ビジネスを学んだ少年時代

菅原社長が葬祭事業を起業したのが25歳。わずか25歳でそのビジネスを立ち上げたことにまずは驚いたのだが、それには菅原社長が生まれ育った環境に一つの理由がある。菅原社長はサラリーマンの家庭に育ったのだが、父親の実家は葬祭業を営んでおり、菅原社長は少年時代からその環境を間近に見ていた。そしてお手伝いとして伯父の仕事を手伝うようになり、それは大学生の頃まで続いた。当初500円の駄賃をもらっていたその手伝いは、大学1年生の頃にはトヨタのクラウンで大学に登校するほどになっていた。伯父に葬祭業のいろはと商人の心を植え付けられた菅原社長は高校生の頃には既に「葬祭業で起業する」という自

標を持っていた。

事業を成功に導いた「丁寧な人柄」

今回キッズデュオの契約に至ったきっかけは菅原社長のもとに届いた一通のDMだった。毎日多くのDMが届くそうだが、これまで一通たりともそれを開けずに捨てたことはないという。一見関係の無さそうなものであっても、そこには何かのヒントやきっかけがあるかも知れない。そんな思いから一通一通丁寧に目を通すのだという。そんな人柄が事業を軌道に乗せていくエピソードがある。

若年25歳の青年が6500万円の資金を苦労して工面し、事務所を立ち上げたが、もちろん知名度もブランド力も顧客もなかった。オープンに向け、事務所で仕事をしている時にあるコピー機の営業マンがやってきた。資金もなく、コピー機を買うことはできなかったが、その営業マンを30分丁寧に応対し、その場は終わった。

やがてオープン初日を迎える。さすがに初日、閑散としているなか、一本の電話があった。電話口はあのコピー機の営業マン



9Fオフィスで挨拶をする菅原社長(左)と奥様の菅原常務(右)

だった。「親父が死んだので、葬儀をしてくれないか」。初日に仕事が舞い込んだのだ。それは紛れもなく、あの時の30分間の菅原社長の丁寧な応対があったからだ。以降、病院や警察など葬祭業に関わる場所を、お菓子や雑誌などの差し入れを持って何度も通い、少しずつネットワークを作り、仕事を獲得していく。競合他社は立派な祭壇や霊柩車を全面に出していく中、ブランド力もお金もない菅原社長は丁寧なサービスに徹した。やがて「若くて一生懸命で丁寧な人」という噂は徐々に広まり、事業は軌道に乗っていった。そんな菅原社長の丁寧な人柄が企業精神として根付いた清月記は、2013年に経済産業省「おもてなし企業選」を受賞。同業異業関わらず、「あそこのサービスを学べ」と評されるようになった。その清月記が運営するキッズデュオが仙台に誕生する。ここでサービスのスタンダードが生まれるかもしれない。



丁寧な人柄の中にも情熱を感じさせる